

密生する彼岸花を踏まないように注意しながら佐竹は幻影の門をくぐり、左の肩越しに振り返った。八重桜の太木が炎上している様子が見える。枝と枝の間に引つかかった頭蓋骨がひととき青白く光る焔に包まれていた。まるでバーナーで焼かれているかのように。頭頂部に二つのいびつな突起が見える。

鬼だ。両性具有者。何の罪も穢れもない、心優しき忌み子。人であつて、人ではない。完璧であるから他を必要としない。人の愛を知らなかった鬼が人を好きになつた。しかも、不帰の人を。

俺は二階堂修哉を最初から知つていた。

前を向き静かに目を閉じながら、佐竹はそう自覚した。結界を超えるとすぐに雨が降り出す。ずぶ濡れになるのも構わず、佐竹はゆつくりと車のほうへ歩き出した。

賢吾が修哉に引導を渡す前、経を上げていたのは俺自身だ。賢吾がすぐにそのあとを追うことを知つていながら、俺は引き止めもせずに逝かせてやつた。修哉の頸を埋め、来世へ送つたのも俺自身だ。そこに弔いの桜を植えたのも。

修哉は両性具有者である自身を憎んでいた。いや、自分の中にある二面性を支配できないことに狂おしい苛立ちを感じていたのだ。鬼哭であり、無慈悲である自分と、人を欲し、愛したいと願う自分。亡魂と化し異界に棲む修哉は、死者となり久遠の修行を続ける賢吾と出逢つた。

二階堂修哉の起源は魔物、朝倉賢吾の起源は死者。出逢うはずのないふたりが出逢い、恋に堕ちた。黒装束の僧侶は皆肉体の変成を望み、硫化水銀を摂取して命を落とした者だ。そこまでして永遠の生を渴望した愚かな人間どもよ。無窮の洞窟を彷徨い歩く賢吾を照らしたのは鬼の持つ左目だつた。此岸と彼岸の狭間に身を置いていることを忘れたふたりは誠を犯し、脚を踏み入れた。そこが無限に続く呪いの廻廊とは知らずに。

決して結ばれないふたりは天命に対する怨念を蓄積させていった。それを吸い続けたのは別離の地であるこの場所。そして、八重比丘尼。忌まわしいこの場所を今、こうして浄化するの俺以外にあり得なかつた。なぜなら、そこに呪を封印したのは俺自身だからだ。

ジュリアまで辿り着き、目を瞑つたまま佐竹は天を仰いだ。涙が次々と流れ落ちても、雨がそれを洗い流してくれる。

今はそれだけが心の救いだと思つた。

鬼と人が交わることをいっただい誰が禁忌としたのだろうか？ どうして俺はあの時魂を解放してやらなかったのか。選択を間違えたというのか。何百年もの間賢吾を苦しめたのは、俺自身だというのか？

佐竹は力なく首を振つた。

違う。俺が賢吾の見鬼となつた時、彼はすでに示寂しじくの人だつた。無間地獄へ引きずり込もうとする鬼から賢吾を護り、次世への導を与えるのが俺の役割。ところが賢吾はその鬼自体に心を奪われていた。どうしようもなかった。止められない宿命の環は、すでにゆつくりと回り始めていたのだ。

どつと疲れを感じながら佐竹はジュリアを発進させた。時刻は九時過ぎ。この雨では帰りの道が渋滞するかもしれない。浩二に電話を入れておいたほうがいいだろう。

中央自動車道を東京方面へ向かいながら、佐竹は茫洋と考え続けた。夢幻の中で桜は燃え、鬼の頭蓋骨と共に最後の甲子を終えた。彼岸花はこれから長い年月あの土地を護り続けてくれるだろう。だが、未だ悲憤を募らせているならばどうか、どうか鬼よ、この伊織を呪い給え。

私は朝倉賢吾の見鬼。

鬼よ、貴方が賢吾を追うなら私はそれを止めようとはしない。

賢吾を幸せにしてくれるなら。伽陀を私に置いていくのなら。

全てを終わりにしてくれるなら。